

# 高齢者の 仕事おこしと 社会参加



## 菊池昭夫（日本高齢者生活協同組合連合会）

第4分科会は「高齢者の仕事おこしと社会参加」をテーマに、高齢者の社会参加を積極的に提議、推進している方々の報告と、活発な討議が行われました。参加者は60名でした。

こうした討議を行なわなければならない最大の理由は、高齢者を弱者ではなく社会的資源として捉えていく考え方が一般化しつつある中で、中高年をめぐる就業問題が極めて厳しいという現実があるということです。この二律背反をどのように克服し、いかに自立と尊厳を持って意義ある人生をまっとうするか、「高齢期の社会参加」を切り口に、さまざまな提言が報告者やコメンテーターから行われました。

では、各報告者の報告やコメンテーターのコメント内容のダイジェストをお届けします。

### ●増田アツミさん（生活協同組合・さいたま高齢協所沢地域福祉事業所「まあち」）

埼玉県所沢市は、高齢化が進むベッドタウンです。そこで、2000年7月生協法人格を取得し、所沢地域福祉事業所「まあち」を立

ち上げました。当初のメンバーは50～60歳代が中心の23人（現在約50名）、最初の資金が70万円でしたが、協力者の好意で、事務所の家賃は1万円でした。

設立当初からの運営理念は「自分たちが受けたい福祉や介護を提供していく」です。また、ホームヘルパー同士仲良くし、毎月の経営会議に50名中30人は参加し、学習会も行っています。ホームヘルパーの時給は一律とし、みんなでその額を決めています。平均年齢は55歳で最高齢は70歳です。

「仕事をことわらない」主義で剪定など、ホームヘルプサービス以外の仕事も積極的に獲得し昨年は117万円の黒字ができました。ただし、利用者は現在50名程度（2002年11月、1000時間）です。これは「顔の見える範囲で」仕事をしていきたいということです。無理して仕事を拡張しても、サービスの質は低下し、利用者にもホームヘルパーにも本来の福祉のあり方が見えなくなってしまうからです。

今後の方向としては、プロとして各ホームヘルパーが仕事を継続していくために、収入を増やすようににしたいと考えていま

## ■コーディネーター

片山信一(日本高齢者生活協同組合連合会)

## ■報告者

増田アツミ(さいたま高齢協「まあち」)

平塚みのり(東京高齢協)

出雲洋一(仙台市荒町商店街)

河合 和(シニアルネサンス財団)

東瀧邦次(ライフ・ベンチャークラブ)

中田宗一(日本高齢者生活協同組合連合会)

高橋 巖(農協共済総合研究所)

## ■コメントーター

守永英輔(淑徳大学)

す。具体的には、現在一人月4万円程度の収入があるのですが、8万円程度を目標に上げていきたいと思っています。

加えて、自立支援のためのミニデイサービスの提供を開始したいと思っています。スタッフも利用者も50～60歳代が多く、利用者、ボランティア、スタッフのたまり場として、みんなで食事をし、おしゃべりできれば、楽しい地域づくりに貢献できると思います。

## ●平塚みのりさん(東京高齢協・町田地域センター代表)

町田センターの介護事業やホームヘルパーの活動(ホームヘルパー全員が町田センターの講座修了生)は大変好評です。サービス利用者や組合員からの紹介と支援センターからの依頼が多くなり、事業は順調に伸びています。ホームヘルパーの登録は約120人で、実動は月に1300時間を60人ぐらいで行っています。

こうした活動を通して感じることは、高齢協のできることは「人の養成」だということです。ホームヘルパー講座は、ホームヘル

パー育成のみならず、受講者が人間としての自分を見つめる機会でもあるということです。そして、介護の現場で、また自分を見つめ、地域とかかわりながら、みんな成長しています。

また、介護の現場では、「高齢化と少子化」という問題を実感せずにはいられません。たとえば、94歳の兄の面倒を86歳の妹が見ているのです。介護のみならず、少子化対策の具体的な活動を行っていかうと思います。

少子化の原因のキーワードは、未婚化、晩婚化、子育て支援といわれています。ここで、わたしたち高齢協がまずできることは、「子育て支援」ではないでしょうか？

町田センターでは、産後支援を町田市産後支援ヘルパー派遣モデル事業として行っていて、7名が担当しています。行政のプランでは現在3時間2400円になってしまいます。これは高いと思われますので、3時間1000円ぐらいでできるようにと考えています。

## ●出雲洋一さん(仙台市荒町商店街副理事長)

荒町商店街は、毘沙門天を核に、街おこしを活発に取り組みようとしている商店街です。参考に巢鴨などの視察を積極的に行っています。そして、仙台市の地域商業支援課は、仙台市内の商店街が“シャッター通り”になってしまう前に、商店街の活性化策を講じています。こうしたことから、コミュニティ活性化事業～TMO（タウンマネジメントオーガニゼーション）補助金～として330万円を得ることが出来ました。これは、単年度補助金であり、以後どのように継続させるかという問題はあるものの、GMO（元気モリモリ街おこし）活動の基盤作りに活用しています。

具体的には、宮城高齢協と提携しながら、事務所の移転を行いました。荒町商店街振興組合の新事務所を、商店街と高齢協とで一緒に使います。

この移転のきっかけは、子供からお年寄りまでが集うGMOセンターをつくり、商店街の活性化につなげて行こうという構想でした。その構想に、宮城高齢協はGMOセンターでヘルパーステーションと地域センターを運営し、商店街との協働事業を進めたいと賛同してくれました。こうした計画をすすめる高齢協の意気は素晴らしいものです。

新事務所の場所は、商店街の中ほどを過ぎ毘沙門天参道の先、荒町バス停前の荒町中央ビルです。商店街の通りに面した1Fです。ここでヘルパーステーション（“のぞみ”のサテライト）やたまり場づくりなどを行います。子育て支援や託児の場としても活用します。

### ●河合和（さんシニアルネサンス財団事務局長）

「高齢期の社会参加」において、ハードの

整備よりも、ソフトな部分の環境構築が大切です。それは、アメリカのAARPの活動を振り返ればよくわかる。そして、それは人間復興～人間を生としてとらえること～から始まります。わたしたちの団体の名前「シニアルネサンス財団」にはそんな理念が込められています。

そして、「高齢期の社会参加」や「地域での支え合い」が人と人とのネットワークから生まれてくるものであるならば、まず人が人として自立していることがそのスタートになると考えます。自立しているもの同士がネットワークを組まなければ、それはネットワークとして機能しないからです。

現在、シニアルネサンス財団は「シニアライフアドバイザー（SLA）」の養成を行い、約2000名のシニアライフアドバイザー（SLA）がいろいろな活動をしています。主な活動には3つあります。

第一の活動は「シニア電話相談（室）」です。困ったことがあったら何でも相談できる場所で、年金相談が6割を占めます。3月ごろは、停退職の悩みが増えるのも特徴です。

シニアの一人暮らしの一番の大きな悩みは住宅問題です。とくに賃貸時の保証人についてはみなさん困っています。そうした対策にも取り組みはじめました。また、ライフプランセミナー（経済、年金、健康、生きがい）を開催し、自立に向けてのさまざまな提言をしています。

第二の活動は「シニア商品に関する調査・研究」です。さまざまな調査を通してわかったことは、シニア夫婦での一番の消費活動は「旅行」だということです。旅行は学びでもあるので、これを積極的に押し進めていきたいと思えます。



第三の活動は「行政と連携して行う事業」です。介護予防と社会参加を目的としたさまざまな事業を行っています。

また、早稲田大学周辺の早稲田商店街と組んだ商店街活性化や起業家になるための活動（起業塾）を行っています。

### ●東瀧邦次さん（ライフ・ベンチャークラブ）

「高齢期の社会参加」ができていない人、とくに男性においては、その本人が持つ問題点に共通項があります。それは「企業社会を意識の上で引きずっている／地域社会の横組織が理解できていない」ことです。生涯現役であり続けるためには、こうした問題点（意識）を解消する必要があります。地域の一員としての自覚が生涯現役であり続けることの大きなポイントであるからです。

ここで求められているのは「人生の目的」です。ここから、人生の計画～ライフプラン～が生まれます。わたしたちは、ライフプランが立てられる人にはその実現のための必要なサポートを行っています。そして、ライフプランが立てられない人のためのプログラムを用意しています。

まず、個人個人が自分の人生の目標を持

つということから「高齢期の社会参加」が始まるのです。そのためには、（企業現役時代から）自己啓発に努め、地域社会への参加や自己の得意分野での社会活動などのライフワークを人生設計に積極的に盛り込んでいく必要性を訴えます。

### ●中田宗一郎さん（日本高齢者生活協同組合連合会）

CC共済は、掛け金500円を出し合い、ボランティアで助け合う活動です。自分で支払い、かつ行動する活動です。どんな現金給付があるのかといった、金銭的なメリット論でこのCC共済を捉えようとするとその本質を見失います。

現金給付ではなく、助け合いという「現物給付」。「元気な高齢者がもっと元気に」「寝たきりにならない！しない！」を新しい仕組みで実現する共済。これがCC共済の本質なのです。

では、具体的に何を行うのでしょうか？

それは「声かけ」と「地域福祉マップ」づくりです。これを通じて、介護予防、加入の促進、地域支え合いを行っていくのです。そして、自己実現や社会貢献、人間の信頼といった価値を具体化していくのです。

わたしたちは、CC共済の活動を通じて、自分を振り返ることもできます。「人生を語り合っているか」「実践を通じて、地域支え合いの理念を共有しているか」……。元気な高齢者のさみしさに共感し、支援していくことがCC共済でもあるのです。

### ●高橋巖さん（農協共済総合研究所）

農村部の高齢化は都市にくらべ、20年先行しています。現在30%を超えています。農村とは高齢者コミュニティであり、農業は



シルバー産業であるというのが実態です。

今、農業は補助金に支えられている面はあるのですが、そこで収入を得ているのは高齢者です。現実には、農村に居住し現業で農業を続け、定年退職後に農業に専念する人は数多くいるのです。その多くは年金収入もあります。ここに見えてくるのは、生きるための収入のために農業をしているだけでなく、生きがい(ゆとりある生活)のために農業をしている高齢者の姿です。

これからの日本の農業をキーワードである少量多品種、低密度の生産は高齢者に適した生産形態です。農業を続けることでうまれる収入は、旅行や孫へのお小遣いといった形にも消費されています。

今後は、最大の世代である「団塊の世代」が定年を控えています。こうしたことから、地域農業の担い手になりうることは明らかです。地域農業の活性化は、高齢化社会の一つのあり方であるのです。

最後に、国の押し進める農業政策のキーワード～若者、企業、大規模、中核化～は、日本の農業のあり方における歴史の針を逆に戻すものと言えるでしょう。

#### ●守永英輔さん(淑徳大学)

みなさんの実践報告や調査研究に敬意を

表すと共に、それに付け加えることなど特にありません。そこで、みなさんと同様に「高齢期の社会参加」を推進している人々の活動をいくつか紹介することで、コメントにかえさせていただきます。

わたしたちシニア社会学会は20～30万人都市の商店街の実態調査を7～8年前から行ってきました。そこにはいくつもの目を見張る商店街の改革事例が見られます。

たとえば、山形市の商店街では、全商店が協力し、一斉に建物を下げて道幅を広げ、ベンチを置いたり、除雪費用を分担しあうなど、歩ける商店街づくりに成功しています。

シニアの健康相談や法律相談をしている商店街もあります。託児所やリサイクルショップがあれば、母親を含めたいろいろな人の交流の場になります。学生の中には企業に背を向けて、リサイクルショップに勤めたい人も増えてきたのが事実です。こうした意識の変革は社会の隅々に行き渡っています。

「じゃおクラブ」中高年の男性が集まったクラブがあります。会社の目的と一体化した人生観しか持てなかった「おやじ」たちが、ここで大きな変化を体験します。会社ではない人生の目的を獲得するのです。そして、小中学生とともに農業体験をしたり、社会福祉に貢献したりしています。

日本の行政や産業は異常な発達を遂げました。その異常さが、子育てを学校任せにしたり、企業にしか自分の生きがいを見出せない人間作りをしてしまったのです。このことが、少子高齢化を導いたとも言えるでしょう。

ですから、市民やシニアが主体となる新

しい社会の仕組みが求められています。これなくして、地域福祉や次世代対策は生ませないでしょう。社会の役割の再統合が必要なのです。公益は行政に、営利は民間にとという単純な割りきりは時代遅れなのです。

それとともに、シニアは引退者で、若者が現役であるという線引きも意味をなさないだけでなく、害になる考え方です。生涯現役や次世代支援はここから生まれてきません。

都市＝消費者、農村＝生産者という分けかたにも問題があります。シニアは依然農村ではパワーを持っている存在であり、そこに団塊の世代が今後働くという構図は、ひとつの暮らしのあり方でしょう。農村は土地を提供し、そこで働きたい人々が暮らすということです。現実には、兼業が長かった農家でも定年帰農をする人々はたくさんいるのです。

このように、シニア社会学会では、シニアが社会を主体的に担っていくために、雇用労働の見直し、仕事おこしを行っています。それは、研究と運動を車の両輪とした、高齢者が働き続けるシステムづくりなのです。

#### (参加者の感想)

- ・ 今時代の現状のかつてなかった時代背景を切実に感じる討論であった。高齢者が社会参加しながら加齢していくことについて、日々の生活や仕事の中でも勉強していかなければと感じた。(62歳女性：高齢者協同組合)
- ・ 現場の話にはインパクトがある。こうした体験や知恵を集積していく地道な活動が、運動の拡大と質の向上には不可欠だと思う。(38歳男性：高齢者協同組合)
- ・ 仕事おこしと社会参加がテーマとなっておりますが、本来社会変革なのではないか。高齢者の自己満足(生きがいの創造)ではなく、この社会経済構造のなかで自己の生き方を確定しておかなければ、若者の支持は得られないのではないか。物的生活に”ゆとり”のあるシニアが社会的総労働の一翼を担えば、低賃金＝格差構造を拡大してしまうこととなります。(62歳男性)
- ・ 各報告者の方が、熱心で引き込まれるようなお話がほとんどでした。自立した高齢協の活動が期待されました。(70歳男性：高齢者協同組合)
- ・ 熱意と意欲のほとばしる分科会でした。現実の切実な話題、拡大のロマンや将来の道の定時など、大変勉強になりました。このうねりが、現実の行動につながる運動になれば社会変革と個人の生活にも波及して、良い結果が出ると思いました。CC共済の提案と高齢協の運動の発展を願っています。(54歳男性)
- ・ 町田地域センターの子育て支援モデル事業は、これからの若い世代の人たちの手助けになる。また、子育ての終わった経験豊かな人がもう一度子どもと接することで、生きがいを感じられるのではないのでしょうか。(36歳女性：高齢者協同組合)

